「人を裁くな」（ルカによる福音書六章三七～四二節）

1　審判者は神

イエスの「平地の説教」（六・二〇～四九）に取り組んでいます。今日は本論の後半の部分です。

今日の聖書の箇所を、六章三六節からとしています。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」。これを新しい段落の始まりとしているのは、主な邦訳聖書には見当たりません。しかしプロテスタント教会にとって重要なルターの聖書はそれを始まりとしていますし、その他にも欧米の有力な聖書で、そうしているものがあります（TOB）。

少なくとも、この三六節を、平地の説教の前（まえ）半分だけに関わるものと考えることはできません。むしろこの節は全体の中心聖句で、平地の説教の後半、今日の箇所の基礎ともなっています。

この言葉を受けて、つまり父なる神のようにあなた方も憐れみ深い者となれという言葉を受けて、私どもが今日取り上げるイエスの言葉、戒め、勧めも語られているのです。このことにまずは注意していただきたいと思います。

さて先週も申し上げたように、イエスが一二人の弟子、使徒たちと共に歩み始める中で、彼らに対し、そのあり方を示したのが平地の説教でした。その意味でそれはとくに私どもにおいて、イエスを信じ従う群れとしての教会において、真剣に受けとられるべきものです。大きく分けて三つの教えからなっています。はじめに三七～三八節です。

> 人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、ゆすり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである（三七～三八節）。

これらは、先ほど申し上げたように、憐れみ深い父にならって憐れみ深い者となれという言葉を受けて、それがもっと具体的に語られている戒めの言葉です。平地の説教の前半は、敵を愛しなさい、というのが基本の戒めでした。人を裁くなというのは同じことを別の言い方で表現したといってもいいと思います。人に対して裁判官のようにふるまうな、ということです。

じっさい裁くということは、悪く評価し、否定し、排除することです。そのときの私どもの顔は、自分の顔は見えないので、分からないかもしれませんが、冷たい観察者としての顔がそこにはあって、ずいぶんと悪い顔になっているのではないでしょうか。簡単にいえば、まことに愛のない顔になってしまっている、そのような気がいたします。

裁くということは、どうして起こるのでしょう。たしかに人はだれも、自覚していると、していないとにかかわりなく、一つの物差しをもっています。善い悪いの物差しです。それを振りかざし、それをもって人を裁き、罪だと決めつけ、赦さない、そういうことがしばしば起こりうるのです。物差しはその人にとって絶対的です。相手がなぜそんなことをしたのか、なぜそうなのか、裁く人に考える余裕はありません。ともかく、その彼、彼女は自分の物差しに合わないのです。

しかし人がそうするとき、忘れていることがあります。私どもが当てはめた規準をもって私どももまた測られるということです。一方的に断罪しておいて、自分に、それは関係ないというわけにはいきません。しかもそれは、人が裁いたその人から反撃を受けるというのでは必ずしもありません。コロナで自粛を要請しておいて、自分はそれに従わない。何度も見せられた光景です。世論は厳しい。しかしその世論も、やがて忘れ去ってくれるかも知れない。しかしここで問題になっているのは、決定的な、終末的な、神の裁きのことです。

神は審判者、神だけが審判者、これが聖書の厳然たるメッセージです（コリント第一、四・三～五）。それは人間が審判者であることを許さず、また人間を審判者であることから解放します。

神が審判者であることによって、人が審判者であることを免除される、解放されるというだけではありません。イエスは、そのことの恵みを語っています。「与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、ゆすり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返される」。気前のいい商人のように神は振る舞います。神の憐れみです。私どもの小さな赦し、小さな贈与、それに、大きな恵みをもって、報いてくださる。神によって私どもの杯は満たされ、溢れます。イエスを信じ、そして従う者たちに、過分な、あふれるばかりの報いが約束されるのです。

2　使徒に求められるもの

今日の箇所の二番目の教えです。

> イエスはまた、たとえを話された。「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。弟子は師にまさるものではない。しかしだれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる」（三九～四〇節）。

「たとえを話された」とありますが、ここにある二つとも、たとえというより、当時ことわざのようなものとして知られていたものでした。それをイエスは取り上げそれに託して語ります。

第一のことわざ、盲人が盲人の道案内をすることは困難だという言い回しは福音書の他の箇所にも出て来ます。たとえば、マタイ一五章一四節です。そこでは、ファリサイ派の指導者たちを指して、盲人が盲人の道案内をし、案内した者も案内された者も穴に落ちてしまうと言われています。

ですから、今日の箇所でイエスは、このことわざを使って、使徒たちに、君たちは

ファリサイ派のようなリーダーとして歩むようなことがあってはならないと、諭しておられるのです。と申しますのも、すでに私どもは、ファリサイ派の人々がイエスのガリラヤ伝道にもついて回っていたことを知っています。彼らが、人を裁き、罪人と決めつけ、赦そうとしなかったことは、私どももすでに見ています。イエスの弟子たちが、断食をしないことをとがめ、安息日に麦の穂を摘み手でもんでたべていたことで、先生のイエスを非難したことを知っています。律法を盾に、人を裁き、罪人と決めつけ、赦そうとしなかったのです。そしてそれは、まさに盲人が盲人の道案内をして二人とも穴に落ち込むようなもの、人々を神の恵みに導いていくことにはならないのです。

もう一つのことわざ、「弟子は師にまさるものではない。しかしだれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる」、これも、福音書の他のところに、複数回出て来ます。

この意味は、弟子たちが、イエスの教えに従って成長し、イエスの働きを引き継いで、それをになう者となる、そうした期待を表明したものと受けとめることができるように思います。

こうして、イエスを信じ従う群れ、すなわち、教会は、ファリサイ派のような、ただ掟をたてに人を裁き、排除する者たちによって導かれる共同体ではありません。教会はイエスを主と告白し、そこに生まれる兄弟としての、姉妹としての関係に生きる人たちの群れであり、聖霊によって導かれる聖徒の交わりにほかなりません。またそうであることを期待されているのです。

さて、今日の箇所に記されたイエスの教えの三つ目は、四一～四二節です。

> あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、「さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください」と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け、そうすれば、はっきり見えるようになって兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる」（四一～四二節）。

これは、マタイの山上の説教にもあるイエスの有名な教えです。「おが屑」と訳されているのは、文語訳でも、口語訳でも「ちり（塵）」と訳されていました。それに対して「丸太」は、文語訳では、梁木（うつばり）、口語訳では梁（はり）と訳されていました。梁とは、柱と柱の上に渡された横木のことです。

この意味は明らかです。人には、他人の、ちりのような欠点も、まるで丸太のように大きく見え、自分の目の中にある丸太は見えないのです。

いま問題は、イエスと共に宣教のわざにたずさわり、イエスのわざを引き継いで行く群れ、教会の形成です。この群れの形成は、他人に悔い改めと改善を押しつけるのではなく、自らの罪に目を注ぎ、悔い改め、御言葉に従う、そこからはじめるようにとイエスは命じています。

3　初代教会への反響

マタイの山上の説教や、ルカの、マタイよりはずっと短い平地の説教も、後の教会に大きな影響を与えた箇所です。「人を裁くな」に関して思い起こすのは、使徒パウロの手紙で取り上げられている、信仰の弱い人と信仰の強い人とのあいだの裁き合いの問題です。

ご存じの人も多いと思います。ローマの信徒への手紙（一四章）やコリントの信徒への手紙一（八章）に出ています。信仰の弱い人というのは肉を食べない、野菜だけを食べる人です。信仰の強い人とは、肉を食べる人々です。肉を食べる食べないという生活習慣に違いが出たのは、当時食肉は、一度神に捧げられ、それが取り降ろされ、市場に出回っていたからです。ある人々は、偶像に献げられたかも知れない肉は食べないという選択をしていたのです。これに対して、真の神だけがおられるのであって偶像なるものはそもそもないのだから、偶像といわれるものに捧げられても、肉は汚れてはおらず、食べてもよいと考えていた人々が信仰の強い人々です。パウロは、この信仰の強い人の側にいました。

このことなど、平地の説教でイエスがいっている、まさに人を裁くなという問題に関わることでした。

食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主はその人を立たせることがおできになるからです（ローマ一四・三～四）。

まさに平地の説教がいっているように、人はだれも、つまり信仰の強い人は、弱い人を軽蔑してはなりませんし、弱い人も強い人を、肉を食べるからといって、裁いてはならないのです。

しかしそれだけでなく、もっと突っ込んだ言い方を、ここではしています。信仰の弱い人であれ、強い人であれ、そもそも、その人は主のもの、主に属する人にほかなりません。その人の審判者は、主であって、その人を立たせるのも倒すのも、ただ主の権能です。

そうであれは、その人に最終責任をもっていない人が、たとえどんな立場にある人であっても裁くことは許されないのです。人を裁くということは、他人の召し使いを裁くことになります。それは越権行為です。

使徒パウロは他の箇所で、「わたしを裁くのは主です」といっています（コリント第一、四・四）。彼は主にのみ仕え、その方の前に責任的に生きようとしました。それゆえ人に裁かれようと人間の法廷で裁かれようと、意に介さないとパウロはいっています。パウロにとって、彼を裁くのは主お一人なのです。そのことは、どんなにかパウロに、解放と自由とを与えていたことでしょうか。私ども一人一人も、主のしもべです。この主にのみ、私どもは申し開きをするのです。それ以外のものから、それ以外の人から、私どもは自由にされて、神から私どもに与えられた自分の人生を歩んでいくのです。

（二〇二一・六・一三）